The Original Story of Chinese Cinema “Yellow Land” and “Reform and Opening”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6761

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

映画『黄色い大地』の原作と「改革開放」

The Original Story of Chinese Cinema “Yellow Land” and “Reform and Opening”.

松村　茂樹

はじめに

筆者は、以前、拙稿「『黄色い大地』『初恋のきた道』と「改革開放」」[注1] で、中国映画第五世代の陳凱歌（1952―　）監督、張芸謀（1950―　）撮影になる『黄色い大地』（中文題『黄土地』・1984）は、保守派的な共産党をメタファーで批判し、1978 年 12 月、鄧小平（1904―1997）により始められた「改革開放」を迫る映画であり、その 15 年後、同じモチーフで撮られた張芸謀監督『初恋のきた道』（中文題『我的父親母親』・1999）は、すでに定着していた「改革開放」を支持する映画であるとした。もし拙稿が当を得ているなら、『黄色い大地』は、「改革開放」という中国の大転換推進を初めて訴えた映画になる。

『黄色い大地』の原作は、共産党に所属する作家であった柯藍 (1920―2006) の散文「深谷回声―回憶採録《蘭花花》民歌時一個挿曲」（以下、「深谷回声」）である。筆者はすでに、拙稿「現代中国映画におけるレジェンドへの反発と回帰」[注2] の中で、先行研究 [注3] を踏まえ、原作のあらすじを紹介し、映画との対比を行っているが、本稿では、さらに一歩踏み込み、この原作にも「改革開放」が色濃く反映していたことを論じてみたい。

このことにより、「改革開放」がいかに中国文芸の世界を「開放」したかを明らかにできるだろう。

「個人」的なことと「1980 年」

まず、柯藍「深谷回声」を、『柯藍散文選』（1983.1 花山文芸出版社）所収本により、冒頭から紹介し、翻出しておこう。

在生活中，我自信我的感情并不十分脆弱。我曾几天几夜，我在战壕里听见过敌人炮火的狂轰滥炸，也曾经在不可测的深夜，漂行在海洋上，经历过八级大风暴的袭击。在这些随时有生命危险的关头，我的感情上还没有发生过不能抑制的波动。但不知为什么，我却特别害怕听见发生在群山深谷经久不息的回声，那回声在虚渺的空中回荡，会引起我一种刺激性的痛苦，叫我难以忍受。这种不能自抑的感情变化，别人是很不容易理解的。

这，大概跟我下面的一段经历有关。

……

一九四二年，大约是三十八年之前，我才二十二岁，那时，我在延安老根据地，因为工作关系，到离延安六七十里的宜川县采录顺天游民歌“兰花花”。这是一首在陕甘宁边区流行较广的古老的情歌，它的主要情节描写青年姑娘兰花花，和自己心爱的人恋爱的时候，由于她的绝色美貌，被地主看中，用优厚的财礼收买了她的父母，被逼迫定亲。兰花花百般痛苦，挣扎反抗无效，最后喝鸦片自杀身死，当时陕北著名盲艺人韩启祥同志告诉我，说现在作的民歌“兰花花”只有几十句。

〔これまで生きて来た中で、私は私の感情が決して脆弱ではないという自信がある。私はかつて幾日幾夜、塹壕の中で敵の砲火の激しい爆撃を聞いたことも、何も見えない深夜に海洋の上を漂い、風力八クラスの襲撃を経験したこともある。これらの常に生命の危険にさらされる瀬戸際にあっても、私の感情に抑制できない揺動が起こることはなかった。ただ、どうしてか、私はとりわけ群山深谷にいつまでも鳴り止まぬこだまが発生するのを聞くのが怖く、あのこだまが渺茫とした空中に響き渡ると、私に刺すような痛苦を引き起こし、私を耐え難くさせるのである。このような自ら抑えられない感情の変化は、他人には到底理解し得ないであろう。

これは、おそらく私の下に述べるような経歴と関係する。

……

一九四二年、およそ三十八年前、私はやっと二十二歳で、その時、私は延安の根拠地におり、仕事の関係で、延安から六、七十里の宜川県に行って順天游民歌（陝西省北部の民謡）の「蘭花花」を採録していた。これは陝甘寧辺区（陝西・甘粛・寧夏にまたがる共産党の根拠地）でやや広く流行した古風な恋歌で、その主な筋は若い娘蘭花花の描写であり、彼女が心から愛する人と恋愛していた時、その絶世の美貌により、地主に見初めら

れてしまい、多額の結納金で彼女の父母を手なづけ、縁談を迫られた。蘭花花は極度に苦しみ、もがき抵抗したがどうにもならず、最後は阿片を飲んで自殺するというもので、当時の陝北の著名な盲目の芸人である韓啓祥同志が私に言うところでは、目下作られた民歌「蘭花花」はわずかに数十句とのことであった。〕

この文章は、書き出しを見ただけで、極めて「個人」的なことが書かれているのが窺える。そして、第2段落で、「これは、おそらく私の下に述べるような経歴と関係する」と、はっきりと作者「個人」のことであるとし、そして第3段落を「……」とし、第4段落の書き出しで、「一九四二年、およそ三十八年前、私はやっと二十二歳で」と、この文章を書いている時期が特定できるようにしている。『柯藍散文選』に収められている他の文章の中には、「1961年」(「魚鷹」)、「一九五四年九月二十三日」(「新的生活在等着」)といった具合に、末尾に執筆時期が記されているものもあるが、この文章では、末尾に記さず、文中に、しかも冒頭部に書かれている。

単純に「一九四二年」に「三十八年」を加えると、「1980年」になる。ただ、「三十八年」の前には「およそ」とあり、正確な時期がわからないようにしてある。しかしながら、「三十八年」という年数を記すことにより、1980年を想定しているのがわかるようにしているのである。1980年なら、1978年12月に開催され、鄧小平の権力掌握と「改革開放」路線採用が決定した中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議(第十一期三中全会)の後で、「改革開放」が既定路線となっているからである。

「集団」から「個人」への流れ

なぜ「1980年」という「改革開放」が既定路線となっている時期であることを示さなければならなかったのであろうか? また、なぜ「およそ」とやや曖昧にする表現を加えなければならなかったのであろうか? これについて考えるにあたり、柯藍と同様に共産党に所属しながら作家活動を行い、中国籍初のノーベル文学賞を受賞した莫言(1955―)の発言を、林敏潔編、藤井省三・林敏潔訳『莫言の文学とその精神―中国と語る講演集』[注4] から引いておきたい。

一九八〇年代は、改革・開放政策が始まってあまり長くはなく、文学においては百花斉放、百家争鳴、積極的探索、大胆な革新、新しき変化を求める状況でした。当時は未だコマーシャリズムは始まっておらず、（中略）商業的活動はほとんどなかったのです。その時代こそ私たちの誰もが懐かしむ文学の黄金時代なのです。」（「莫言に関する八つのキーワード」インタビュー）

なぜなら八〇年代半ばには、思想解放運動は始まってはいたものの、なおもタブーが多かったからなのです。解放後数十年の間に人々の個性は強く圧迫を受けており、真に縄が解かれた訳ではなく、『赤い高粱』のような轟然と個性を賛美し、烈火の如く情念を歌い上げる作品は、まさに当時の庶民の長きにわたって抑圧されてきた怒りを吐露したい、という心理に合致したのです。（「現代文学創作における十大関係をめぐる試論」）

一九八〇年代末の時点では、中国の改革・開放は一〇年足らず、当時の私たちの考えは十数年前と比べてずっと解放されておりましたが、実際にはまだ不十分で、中国の庶民はなおも長期にわたる集団化社会制度のうちにあり、個性は圧迫され、誰も自由に個人の意見を言うことが憚られ、誰もが家で言うことを外で言うことは実際にはまったく異なる二つの言語体系に属し、まだ誰も自由に個性を表現することができなかったのです。（「私の文学経験」）

つまり、莫言は、1980年代は文学の黄金時代であったが、「集団」から「個人」への流れにおいて、80年代半ばもなおタブーが多く、80年代末でもまだ不十分であったと言うのである。

80年代末でもまだ不十分であったとするなら、1980年になるかならないかの頃は、「改革開放」により、「集団」から「個人」への流れが始まったとしても、いつその流れが逆流するやらわからないと考え、「個人」を前面に押し出すのは今少し様子を見てからということになるのが普通であろう。だが、柯藍は、「1980年」と思われる年に、それを断行しているのである。しかも「およそ」とし、「改革開放」という党の号令に従ったというより、自身が「個人」として書きたかったことを「改革開放」をきっかけとして書いたとしたかったのであろう。

作者の思い入れが込められた作

「深谷回声」では、民歌「蘭花花」を採録するため、陝北の金盆湾一帯の山村に行く途中、暴雨に遭った「私」は、山の中腹に窯洞（横穴式住居）を見つけ、泊めてもらう。そこには黒ひげの男性と四十歳位の女性、そして「十七、八歳」の娘がいた。

当我抬头，借着灶口强烈的火光，凑近看了一眼这位青年姑娘时，我真是吓了一跳。说确切一点我真是吓得有些惊呆了。和我坐得这么靠近的姑娘，竟是一位艳色美人，我进来了这么久，怎么没有看出来呢？我忍不住又偷偷看了她几眼，这真是一位标准的东方美人。弯弯的长长的柳叶眉，两颗杏核大的眼珠，好象是两颗亮漆的玻璃珠子。还有那高高的鼻子，那白里透红的面颊，好象是经过精心雕制的艺术品，我当时想，在这偏僻的山村，怎么会出现她这么一只金凤凰啊？

〔私が顔を上げ、かまどの強烈な火の光を借りて、近くでこの若い娘を一瞥した時、私は本当に跳び上がるほど驚いた。もっと的確に言うなら私は本当に些かあっけにとられるほど驚いたのだ。私とこんなに近づいて坐っている娘は、意外にも艶やかな美人で、私は入ってからこんなに長い時間、どうしてわからなかったのであろうか。私は我慢できずまたこっそりと彼女を何度か見たが、これは本当に典型的東洋美人であった。曲線を描いて長々と伸びる柳の葉のような眉、二つの杏の種大の目は、まるで二つの漆の輝きを持つガラス玉のようであった。またその高い鼻、その白い中に紅がさす頬、まるで入念に彫刻が施された芸術品であり、私はその時思った、このような辺鄙な山村に、どうして彼女のような金の鳳凰が出現したのかと。〕

つまり、その娘は絶世の美女であった。「私」は自ら十九歳だというこの美貌の娘に魅かれて行く。そして、娘は「私」に、自分を「妹」にして連れて行き、「公家人」として革命に参加させて欲しいと言う。「私」は、この美しく聡明な娘は、歌舞団の俳優にも、農村の女性幹部にもなれると思ったが、すぐには返事せず、金盆湾に行って「蘭花花」を採録したらまた話そうと言う。出発の日、山の谷間を歩く「私」を、娘は、「蘭花花」を歌いながら山頂を歩き、十里余りの道を送ってくれ、最後、「私」に向かって「あ

――は――」と叫び、別れを告げた。そして四日後、「私」が戻って来ると、娘は亡くなっていたのだ。

一听说祭灵，炕上姑娘的妈妈连忙下到脚地，又重新燃了三根线香插在萝卜上连哭带嚎地叨念说：

“呜――呜，有过路的同志来祭奠你，你也传名了，你不能怪罪你后爹和我，不是我们贪图财礼，逼你成婚，只怪你有话不说，错喝洋烟……呜呜――我抚养了十六年的翠巧儿！呜――”

〔霊を弔うと聞き、オンドルの上にいた娘の母親は慌ただしく土間に降り、新たに三本の線香を大根の上に挿して慟哭しながら呟くように言った。

「うっ――うっ、通りすがりの同志がお前のお参りをしてくれて、お前も名があがったね、お前はお義父さんと私を恨むんじゃないよ、私たちは結納金目当てで、お前に結婚を迫ったんじゃないからね、ただお前が言ってくれなかったことを恨むよ、阿片を飲んじまうなんて……うっうっ――私が十六年育てた翠巧よ！ うっ――」〕

この母親の言葉により、娘の名前が「翠巧」であり、本当は十六歳であったことがわかるのである。「私」は、山にこだまする娘の「あ――は――」という叫びが、絶望の中で救いを求める叫びであったことを知り、自責の念に囚われ、今も群山深谷にいつまでも鳴り止まぬこだまを聞くのが怖いのである。

以上が、「深谷回声」のストーリーである。柯藍は、前出『柯藍散文選』の「跋」で、

从选集中的散文看，我想说一点，我的散文都是写我自己。写我的感情，写我和我有过接触的人，写我所经过的生活，写我的回忆。

〔選集中の散文について、私が少し述べておきたいのは、私の散文はどれも私自身を書いていることである。私の感情を書き、私と私が関係した人を書き、私が会った人と出来事を書き、私が経て来た人生を書き、私の回憶を書いた。〕

と述べており、この「深谷回声」も柯藍自身が経験した事実に基づいて書かれたのがわかる。また、「深谷回声」は、年代順ではない『柯藍散文選』の最後に置かれており、柯藍が最も思い入れを込めて書いた作であると思われる。

「才子佳人」と「愛と死」

だが、1942年に経験した「個人」的なことを、柯藍は、1980年と思われる年まで書けなかった。それは、前述のように、「改革開放」以前は、「個人」よりも「集団」が優先されていたからであるが、さらにあと二つの要素がネックになっていた。それは「才子佳人」と「愛と死」である。

「深谷回声」は、文芸工作に携わる「私」と美貌の娘が主人公であり、これは典型的な「才子佳人」の物語と言わねばならない。前節に、娘が絶世の美女であることを詳細に述べている箇所を引用したが、娘が美しいことは、この他でも繰り返し述べられており、美人だから「私」が娘に魅かれ、愛したことを隠そうともしていない。それが作者の素直な感情であったのだろう。だが、これは「改革開放」の前には決して許されないことであった。

「改革開放」の前とは1966年から1976年まで続いた文化大革命期とその後の移行期ということになる。文革期には、文学・芸術に種々の批判が加えられており、「才子佳人」はその最たるものであった。まず、1966年11月28日付『北京周報』1966年第50号に掲載された「文学・芸術界のプロレタリア文化大革命の大集会における周恩来、陳伯達、江青同志の重要演説」の内、「江青同志の演説（摘要）」[注5] を見よう。

> 数年前、わたしは比較的系統的に一部の文学・芸術にふれたことがあります。当時、まずわたしが気づいたことは、なぜ社会主義中国の舞台に幽霊劇が上演されるかということでした。つぎにわたしがとても不思議に思ったことは、京劇は現実を反映する点であまり敏感ではないのですが、しかし『海瑞の免官』『李慧娘』……などのようなひどい反動的政治傾向をもった劇があらわれ、そのほかにも「伝統を掘りおこす」という体裁のよい名目で、帝王将相、才子佳人をとりあつかったものがたくさん上演されました。

このように、江青（1914―1991）という文革を推進した当時のリーダーの一人が否定した「才子佳人」をテーマにすることなど、到底できなかったのである。

また、「深谷回声」は、「私」が愛した娘が死ぬという「愛と死」の物語になっており、これも許されなかった。「林彪同志の委託によって江青同志がひらいた、部隊の文学・芸術活動についての座談会の記録要綱」[注6] を見よう。

> これまで、一部の作品は歴史的事実をねじまげ、正しい路線をえがかず、もっぱらあやまった路線をえがいてきた。一部の作品は英雄的人物をとりあげても、みな規律を犯す人物としてえがき、あるいは英雄像をつくりあげても、作為的な悲劇的結末で死なせている。一部の作品は英雄的な人物をえがかず、もっぱら中間的人物、実際には立ちおくれた人物をえがき、労働者、農民、兵士の形象を戯画化している。ところが、敵をえがくばあいには、人民を搾取し、抑圧する敵の階級的本質を暴露せず、はては敵を美化さえしている。また、一部の作品はもっぱら恋愛や低俗な趣味をあつかい、「愛」と「死」は永遠のテーマだなどといっている。これらはみなブルジョワ的、修正主義的なものであって、だんことして反対しなければならない。

この江青がひらいた座談会の記録の内容は、「社会主義の文化大革命」という呼称がはじめて用いられた 1966 年 4 月 18 日付『解放軍報』社説「毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ社会主義の文化大革命に積極的に参加しよう」[注7] に、ほぼそのまま引き写されており [注8]、この一節も例外ではない。これによって、「愛と死」の物語は「社会主義の文化大革命」としてタブーとなったのである。

かくして、柯藍が書きたかった「個人」的で、しかも「才子佳人」による「愛と死」の物語は、「改革開放」まで書けず、「改革開放」が始まるや、堰を切ったように「自身を書いた」散文として作品化されたのであろう。ちなみに、文革以前でも、共産党に所属する作家の立場としてはこのようなテーマで書くのはやはり難しかったと思われ、また、そもそも深い傷を負った経験を書くには、一定の時間経過が必要であったと思われる。

「改革開放」の文化的効用

このように見てくると、『黄色い大地』の原作である「深谷回声」も「改革開放」の申し子的作品ということになる。だからこそ、『黄色い大地』の原作に選ばれた（柯藍は、前出『柯藍散文選』「跋」で、「“深谷回音”曾得到过评奖，并有人要改变为电影〔「深谷回声」は賞を受けたことがあり、また映画化したいという人がいる〕」と述べている）のであろう。

ただ、『黄色い大地』は、前出の拙稿「現代中国映画におけるレジェンドへの反発と回帰」で述べたように、監督の陳凱歌自ら挿入歌「救万民靠共産党〔万民救うのは共産党〕」の歌詞を作詞するなどして、主人公の少女・翠巧の「共産党」に対する思いをよりクローズアップさせており、翠巧が美女であったことや、それゆえに文芸工作員の顧青が翠巧を愛したことは、少なくとも表面上は取り上げられていない。

それは、陳凱歌の目的が、政治的側面における「改革開放」推進要求にあったからであろうが、実は、書きたくても書けなかった「才子佳人」や「愛と死」が書けるようになったという「改革開放」による文化的効用の側面をすくい取っていないと言わざるを得ない。

これに対し、『黄色い大地』の15年後、張芸謀が同じモチーフで撮った『初恋のきた道』は、街からやって来た教師という「才子」と村一番の美人という「佳人」が愛し合うという典型的「才子佳人」の物語となっており、主人公の少女は教師だというだけで会う前から恋しており、教師は美しい少女を一目見ただけで愛するのである。また、愛ゆえに死ぬというパターンではないが、少女の夫となった教師が亡くなるという「愛と死」の要素も取り入れられており、こちらの方が「改革開放」の文化的効用を取り入れていると言えよう。

おわりに―「改革開放」の意義

本稿では、映画『黄色い大地』の原作である柯藍「深谷回声」に見る「改革開放」の反映を「個人」「才子佳人」「愛と死」をキーワードに論じ、「深谷回声」は、「改革開放」が始まったからこそ書けた作品であったことを明らかにした。

これについては、作者の柯藍自身も、「一九八一年二月二十七日」に書いた「我的散文的探索和尝试」（前出『柯藍散文選』所収）の中で、

粉碎“四人帮”四年多以来，我们的散文，无论从解放思想，拔乱反正，贯彻三中全会的政策精神等方面，都获得了巨大的成绩，（后略）

〔(江青を含む)「四人組」打倒から四年余り、私たちの散文は、思想をこれまでの偏見から解放し、混乱を治めて正常に戻すのはもちろんのこと、三中全会の政策精神等を貫徹し、どれもが巨大な成果を獲得しました、(後略)〕

と述べ、1978 年 12 月の三中全会、つまり鄧小平による「改革開放」の開始が、作家の自由の拠り所となっていることを表明している。

それまでなかった作家の自由が、「改革開放」によってもたらされた。筆者は、もとより「改革開放」がオールマイティーであるとは考えていないが、少なくとも、この点において「改革開放」の意義は大きかったと思うのである。

[注1] 松村茂樹「『黄色い大地』『初恋のきた道』と「改革開放」」(『コミュニケーション文化論集』第 12 号 2014.3.18 大妻女子大学コミュニケーション文化学会 所収)

[注2] 松村茂樹「現代中国映画におけるレジェンドへの反発と回帰」(『日本中国学会二〇一八年度研究集録』2018.10.6 日本中国学会 所収)

[注3] 好並晶「「中国現代の小説と映画 : 多重性を読み解く」講義記録」(『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編』第 4 巻第 2 号 2013.11.30 近畿大学全学共通教育機構教養・外国語教育センター 所収)

[注4] 林敏潔編、藤井省三・林敏潔訳『莫言の文学とその精神――中国と語る講演集』(2016.7.30・東方書店) は、同『莫言の思想と文学――世界と語る講演集』(2015.11.20・東方書店) の第二弾として刊行された。筆者は、その書評「莫言は改革・開放によって生まれた―必読の莫言講演集二冊」(『東方』第 430 号 2016·12·5 東方書店 所収) で、莫言の「改革開放」への視点を論じている

[注5] 東方書店出版部編『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第二巻 (1971.3.25 東方書店) 所収

[注6] 東方書店出版部編『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第三巻 (1971.4.25 東方書店) 所収

[注7] 東方書店出版部編『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第一巻 (1970.12.5 東方書店) 所収

[注8] 吉田富夫「煉獄の中の知識人」(吉田富夫・荻野脩二編『原典中国現代史 第 5 巻 思想・文学』1994.7.20 岩波書店 所収) により指摘されている